

「重症心身障害の方のコミュニケーション支援の考察と今後の取り組み(I)」

今年9月に開かれた国際福祉機器展において、タブレットPC用のコミュニケーション支援ソフトが発表された。今までは個別の機器としてあったトーキングエイド(五十音表の文字盤スイッチ)が、タブレットPCのソフトとして開発され、タッチパネル上の操作が可能になった。このツールは、東京大学先端科学技術研究センターの障害をもつ子どものためのモバイル端末活用事例研究の中の「魔法のじゅうたんプロジェクト」の成果だという。「魔法のじゅうたん」は、モバイル端末が子ども達をどこにでも連れていき、リアルな学習体験を可能にする事に由来したネーミングである。私はこのプロジェクトが、多くの学校や大手携帯会社までも巻き込み、より活動的なコミュニケーション支援を目指して、最先端の情報技術を駆使し研究されたものであることに大きな感銘を受けた。

私は、理学療法士という仕事柄、重症心身障害の方と接する機会が多い。リハビリテーションは、ご本人・ご家族のニーズや目標設定のアセスメントを日々確認し合いながら進めなければならない、そのための相互のコミュニケーションや意思の疎通は欠かせない。しかし、重症心身障害の方が、指や首の僅かな動きなど全身を使って自己表現しているにも関わらず、受け手側である私が自分の思い込みで、本人の意思を決めつけわかっているかのように受け取ってはいないだろうかと感じる事がある。ついつい安易にYES/NOの二者択一の範囲の中で、本人の意思を選んでしまっているかもしれない。しかし、本当は誰もが複雑な思いを抱えているのは当たり前で、二択だけでは解決されない意思を抱えているかもしれないのだ。

だが、未熟な私にとっては、その思いをくみとることはとても難しい。だから、大切なのは、私たち支援者がその思いを丁寧に考える努力をし続け、意思疎通を積み重ねていくことであると思う。相手が何を伝えようとしているか、何を思って表現しているのか、自分も思い悩みながら応えていくことがコミュニケーション支援の第一歩ではないか。あるいは、それは支援というより障害の有無などに関係なく、人間であれば誰もが行うコミュニケーションの基本なのだと気付かされる。

そうした中、今回新しく発表されたタブレットPCのコミュニケーションツールは、1つのハードに多様なソフトが揃っており、新しい伝達方法を手軽に試し、バリエーション豊富な選択をする事が可能であることが魅力的である。しかし、選択肢が広がる分、受け手次第で、本人の意向とは違う方向に受け取られる危険性も孕んでいる。つまり、私たち支援者側のコミュニケーション能力が試されているともいえる。どんなに使い易い機器があっても、本人が思いを伝えたい相手とそれをしっかり受け止める相手がいなければ意味がない。

今回のタブレットを使ったコミュニケーションツールへのもう一つの期待は、今までの福祉用具のような「障害者向け」といった枠組みではなく、障害の有無に関わらず誰もが使用するタブレットというハードで支援が行えるということだ。このままハードが進化すれば、今まであった「障害」という特別な言葉は、誰もが抱えている悩みのようなただの「困難な事」という表現へ変化しうる将来が来るかもしれない。

最先端の情報端末のデジタル技術と、1人1人の思いを丁寧にくみとっていくアナログなコミュニケーション技術、その両方を日々大切にしていきたい。

小川由美子（ハロークリニック相談支援室）